

【300】

氏 名（本籍）	せき ば あ り か 関 場 亜利果（東 京 都）		
学 位 の 種 類	博 士（デザイン学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4132 号		
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	グループ T によるミリオラマとアルテ・プログランマータの研究 － 1960 年代イタリアにおけるキネティック・アートの展開－		
主 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿 利 治
副 査	筑波大学教授		三ツ井 秀 樹
副 査	筑波大学助教授	博士（工学）	野 中 勝 利
副 査	埼玉大学助教授	博士（芸術学）	井 口 壽 乃

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は 1950 年代・60 年代のイタリア現代美術に関わるもので、とくにテクノロジーを主要な表現手段として駆使しようとしたグループである「グループ T Gruppo T」に焦点をあてた論考である。同グループについては、同時代の日本でも紹介されたことがあるものの、歴史的な意義や位置づけなどは本国のイタリアでもようやく始まったところである。

序章ではまず本論文の意図と先行研究、さらに構成について述べる。

第 1 章「グループ T の結成」では、まずグループ T がグループを結成する以前の状況について、5 人のメンバー、すなわちジョヴァンニ・アンチェスキ Giovanni Ancheschi, ダヴィデ・ボリアーニ Davide Boriani, ジャンニ・コロombo Gianni Colombo, ガブリエーレ・デ・ヴェッキ Gabriele De Vecchi, そしてグラツィア・ヴァリスコ Grazia Varisco の出会いと彼らが交友を深めてゆく過程を、当時メンバー共通の場となっていたプレーラ美術アカデミーにおける活動を中心に概観する。ついで、グループ T が「時間」芸術を標榜するに至った時代背景やヨーロッパの文化状況について述べて、1950 年代末から 1960 年代にかけてのミラノの知的環境において、彼らがグループ結成前に交流を持ったブルーノ・ムナリーなどの芸術家・文化人との関係を明らかにする。さらにグループ T が誕生した状況を指摘し、「時間」という概念がどのような経緯を経て中心的課題に据えられ、これを探求することがいかにグループ T の独自性になると考えられたのかについて考察する。

第 2 章「ミリオラマ Miriorama」では、グループの公式活動「ミリオラマ」について、まず誰がどのような理由により命名したのかという、活動名の由来に検討を加える。次にグループ T の宣言文『ミリオラマ』を示した上で、1960 年から 1964 年の間に計 14 回開かれた展覧会「ミリオラマ」について、それぞれの参加者、展示場所、出品作品等々詳細を明らかにする。

第 3 章「アルテ・プログランマータ (Arte programmata)」では、イタリアにおけるキネティック・アート運動といえるアルテ・プログランマータ Arte programmata がどのような運動であったのか、その実態を明らかにし、造形の特質、美術史における位置づけ、およびこの運動でグループ T が果たした役割を考察する。まず日本では殆ど知られていない「アルテ・プログランマータ」の定義を確認するために、一般に欧米の事典類でどのように解説されているかを考察し、この運動の一般的輪郭を示す。つぎに、アルテ・プログランマータ

の由来に遡り、この運動において当初意図された造形目的を明確にし、作品を例にあげながら、その造形性を考察する。そして、この運動の中核を成す二つの大きな展覧会、ヨーロッパ巡回展とアメリカ巡回展について述べ、アルテ・プログラマータの具体的な内容を示す。グルッポ T がアルテ・プログラマータ運動に関わる中で制作した作品について検証するとともに、この運動の中で果たした役割、また反対にアルテ・プログラマータへの参加がグルッポ T の造形に与えた影響について考察する。さらに、日本における受容状況について触れる。最後に、本論文での調査で明らかになった事項を踏まえて、アルテ・プログラマータの史的位置づけを試みる。

第 4 章「グルッポ T の造形の特徴」では、これまで単にキネティック・アートのグループとして位置づけられてきたグルッポ T の造形について「時間」と「デザイン」という二つの視点から考察する。「時間」との関連を検証する上では、グルッポ T がキネティック・アートの歴史における貢献、また同時に他のキネティック・アートの作家・グループと区別される独自性について、時間の不可逆性の表現であったことを明らかにする。ついで「デザイン」との関連性を論じ、イタリアにおけるアートとデザインの相互作用の一例としてグルッポ T の活動をとらえる。アルテ・プログラマータの活動をはじめとしたグルッポ T の幅広い造形活動と、その中に見られる「キネティック」ととどまらない特徴を考察することにより、これまでキネティック・アートの作家としてのみ位置づけられてきたグルッポ T の存在意義を、現代的な視点から再検討することを試みる。

最後の結章において、それまでの議論を総括し、論文で明らかになった点をまとめ、今後の研究の展望と方向性について述べる。

なお、本論にはさらに付録として著者が 2003 年 5 月から 11 月の間に行ったグルッポ T の四作家ヴァリスコ、デ・ヴェッキ、ポリアーニ、アンチエスキへの長文のインタビューが付されている。これは各作家の校訂を経て公表の許可を得たものである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

1950 年代・60 年代の美術を史的な研究において扱うことは、研究資料の蓄積がない時代であるので困難な作業を伴う。この時代にはさまざまなキネティック・アートのグループ、グルッポ N、フランスの GRAV（視覚探究グループ）などが登場してきたが、まだ個別的な解明がなされているとはいえない。イタリア本国でも、その意味での研究が始まったのはつい最近といっても過言ではない。

本研究の対象は、ミラノを拠点として、同市の文化的な環境に立脚して、登場してきたグループで、キネティック・アートを実践したグルッポ T である。先駆者のブルーノ・ムナリーや記号学者として名高いウンボルト・エーコの周辺から出発することで、このグループが受けた恩恵は見逃せないことがわかる。

そして、その結成とその芸術活動について、現地での作家との貴重な、資料性の高いインタビューを重ねながら、調査した結果を土台にして、グループだけに留まらない運動の周辺、たとえばアルテ・プログラマータを含めて、丁寧な検討を加えている。

とくに、「ミリオラマ」はグルッポ T の展覧会活動であるが、そのそれぞれの内容を入手資料から可能な限りで再現し、その行跡を追っている。その結果、東京展の順番が作品輸送の関係等でずれていることを示すなど、丹念に事実関係を明らかにしている。また、アルテ・プログラマータ展のアメリカ巡回展の資料をアメリカで調査するなど、幅広い国際的な視野を確保していることも重要である。

グルッポ T の位置づけを目指して本研究の目的は概ね達成されたといえるが、しかし、各「ミリオラマ」、あるいはアルテ・プログラマータ巡回展の反応など、今後まだ調査研究すべき課題が残されており、著者にはさらなる研鑽を求めたい。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。